
悟空 切ナイ恋物語

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悟空　切ナイ恋物語

【著者名】

悲劇のM

N8582F

【あらすじ】

お氣づきの方もいるかと思いますが、恋空の一次創作です。美嘉＝ベジータ、ヒロ＝悟空、ノゾム＝クリリン、アヤ＝ナッパです。

恋空で泣いちゃうよんな乙女は読まない方がいいかも。

第一話

ベジータ＝甘い物が好きな乙女

カカロツト＝ベジータが恋してるイケメン男の子。心臓病に掛かっている

フリーザ＝恋敵。族のリーダーでベジータをレイプするより下り端に指示する

クリリン＝カカロツトの友達

もしもあの田畠君に出会っていなければ

こんなに苦しくて

こんなに悲しくて

こんなに切なくて

こんなに涙が溢れるような想いはしなかつたと思つ。

けれど君に出会っていなければ

こんなに嬉しいくて

こんなに優しくて

こんなに愛しくて

こんなに温かくて

こんなに幸せ気持ちを知ることもできなかつたよ…。

涙じりえて私は今日も空を見上げる。

空を見上げる。

第一話

「あーーー超気減ったしつ

」

待ちに待つた敵前休憩。

ベジータはいつものように机の上でお弁当を開く。

戦闘は面倒。

だけど同じ部隊で仲良くなつたナッパとトランクスと一緒にお弁当を食べるのが唯一の楽しみなのだ。

田原ベジータ

今年の4月、部隊に入隊したばかりのサイヤ人一年生。

入隊してからまだ
三ヶ月足らず。

仲良しで氣の合つ友達も出来て結構楽しく過いでていた。

チビだし
バカだし

特別かわいいってわけでもないし
特技なんてないし
将来の夢なんてあるわけもない。

部隊に入つてすぐに染めた明るい茶色のストレート髪。
ほんのりと淡いサイヤ人スースがまだあまり馴染んでいない今日この頃。

訓練時代から平凡な生活を送ってきた。

普通に友達もいた。
普通に実戦もした。

倒した人数は三人。

多いのか少ないかなんてわからない。

だけど共通してるのは

どれも短期間で終わりを告げているところだ。

本当の戦闘なんて知らない

知つてるのは遊びの戦闘
ただ一つだけ。

戦闘なんて
しなくてもいい。

そんな中…

君に出会った。

このまま平凡に終わるはずだったベジータの人生は、君に出会ったことによつて変わっていく…。

第三話

いつものように
ベジータとナッパとトランクスの三人は
もくもくとお弁当を食べていた。

食事の時つて無言になるのはなぜだろ？

その時、土を踏む足音がした。

それと同時にポケットに手を入れた一人の男が三人のもとへと
近づいて来た。

その男は三人の前に立ち止まり、
軽い口調で話し始める。

「こちわー！俺の名前はクリリン。隣のクラスなんだけど知つ
てる？」

目を合わせる三人

しかしそのまま知らんぷりをして
お弁当を食べ続ける。

高校に入学してからクリリンの噂をたくさん聞いた。

女つたらし。

手が早い。

遊び人。

クリリンは毎日のように違う女を連れて
校内を歩いている。

“クリリンに気をつけろ！”

“クリリンに狙われた女は逃げられない”

そんな話を聞いたこともあつたっけ…。

高めの身長に

整った顔。

メッシュが入つて
ワックスで無造作にセットされている髪。

頭髪なんて一本も生えてないのに。

何かを見透かすようじっとみつめる瞳。

モテる要素を持っているのは確かだ。

問題は性格。

この軽い性格はどうにかならないものか…。

そこまで悪い噂を聞いていながら関わるつもつなどもひけたない。

第四話

三人はクリリンの存在に気付かないフリをしながら、弁当を食べ続ける。

「あれ～無視かよ？俺と友達になるひつぜー・番号交換しようつー。」

あまりのしつけに喉が渴き、
イライラしながら近くにある麦茶を手に取り「くんと一口飲み込む
ベジータ。

「うーむ、どうあるか・・・まあ、問題無いだろつ。交換する
か」

沈黙の中、

突然言葉を発したのはナッパだ。

ベジータヒトランクスはギョッとした顔で目を合わせた。

ナッパが笑顔でクリリンと
番号交換をしている。
信じ難い光景..。

クリリンが満足げに教室から出て行くのを確認し、
ナッパに聞いたました。

「おいナッパ、何であんな軽そうな奴に番号を教えるんだー!? 痛い
目を見ないとわからないのか貴様??！」

そんなベジータの心配をよそにあっさりと答えるナッパ。

「俺、イケメンに目が無いんだよー!ウフッ」

ナッパは大人っぽくて綺麗な女の子。

スタイルがよくクリリンと同様のスキンヘッドのつんつる頭が特徴

男運が悪く付き合つ男は軽い感じの男ばかり…。

だから彼氏が出来ても、付き合つてすぐ別れての繰り返し。

「だめだぞナッパ、あんな男に本気になつたりしては。」

真面目な顔で心配するトランクスに対し
ナッパは軽い返事をした。

「大丈夫だろ」

第五話

戦闘が終わり、
家に帰つて部屋でじっくりしながらトレーニングをしていた。

その時…

プルルルル

部屋に鳴り響く着信音。

しかも登録してない
知らない番号から…。

誰だろ？？？

相手を探るよ、ひかる。

『誰だ貴様……？？』

『……』

……無言。

『おい！聞いてるのか？？』

少し強氣で言つてみる。

ガチャツ
ブーブー

切られてしまった。

いたずら電話?
間違い電話かな。

プルルルル

再び鳴り響く着信音。
さつきと同じ番号だ。

どうでもいいような声で電話に出た。
どうせまた無言だと思い

『何だ！』

『…し？もしもーし…』

電話の向こうから微かに聞こえる
聞き慣れない男の声。

『だ、誰だ？？』

電話の向こうの相手は
鼓膜が破れてしまつくらいの大聲で答えた。

『…ベジータ？悪いなあ電波悪くて！クリリンだけど、わかる？今
日の昼休み話かけた奴だよ！』

ゲツツ！クリリン？

クリリンってあの女つたらしのクリリン？

今日ナツパと連絡先交換してた…あのクリリンさん？

頭の中はパニック状態。

返す言葉が
見つからない。

いつそのこと電話を
切つてしまおうか…。

第六話

電話を切つてしまおうとボタンに指を近づけた時
クリリンは再び話し始めた。

『突然電話したら驚くよな、ごめんごめん。ナッパから番号教えてもらつた。友達になつてくれよ!』

なるほど。

ナッパが勝手に教えたんだ。…つて納得してゐ場合じやなくて…!

明日ナッパへの軽い復讐を決意しながら
冷静を装つて答えた。

『…で何の用だ??』

『だからー、俺と友達になつてよーなつ?頼むよー』

軽い…軽すぎる。
軽い男は苦手。

『…仕方ないな…』

仕方なく友達になることを承諾して電話を切った

そうしないと電話を切ってくれないような気がしたから。

クリリンの番号を登録…
一応しておぐか。

ジリリルリ

不快な目覚ましの音で目が覚め、
今日もまたいつも通り部隊へ向かう。

玄関で上靴に履き変えていた時
ナッパの姿を見つけた。

興奮気味に
ナッパのもとへ駆け寄る。

「おーナッパ！！勝手に番号教えるなと何度も言えればわかるんだ！昨日クリリンから電話が来たんだぞーーー！」

「悪いな だつてクリリンの奴がベジータの番号教えりつひねりいかつたんだ。なんかおーじるから許してくれ」

何事もなかつたよつたナッパの横顔を見つめながら深くため息をついた。

第七話

じめじめしたある日の午後…

訓練時代からの親友であるピッコロとベジータの家で遊んでいた。

休みに入つて毎日のように遊んでいる。

ピッコロはどんな悩みでも相談出来る大切な友達。

訓練時代の時はよく一人で悪いことをしたりもした…
いわゆる“悪友”であつたりもする。

この日もぐだらない話をしながら盛り上がり上がっていたその時…

プルルルルル

部屋に鳴り響く着信音で一人の会話が途切れた。

「あまあピッコロ、悪こが電話で出るわ」

「構わん」

画面を見ると、
知らない番号からだ。

しかもPHDからではなく家の電話から……。

「出なーのか?..!..」

不思議そうな顔をしながら覗き込むピッコロ。

「……やめておーい。知らない番号にみすみす出る俺じゃないーーー。」

そう答えて電話を切ったとしたその時、
ピッコロはデータの手からエンドを奪い電話に出た。

『もしもし？私はベジータの友人だ。ベジータ？今かわる』

「高校の友達だそうだ。変な人じゃなかつたぞ！」

ピッコロは受話器をおさえながら小さな声でそつと囁き電話を手渡してきました。

第八話

仕方ない。

ここは電話に
出るしかない。

『…もしもし』

『もしもし俺！クリリンだ ベジータ、俺のこと避けるしなー、ひ
でいぞ！俺泣きそうだぜ』

ゲツツ！！

このウザいくらいのテンションの画せ…。

クリリンだ。

『何だ？？』

冷たく言い放つ。

『またまたあ～ベジータは冷たいなあ！俺何かしたか？してないだ
ろ！ハハハハ』

酔っているのか

クリリンの口は止まらない。

『俺PHS止められちやつてさー、参った! 今、悟空つて奴の家から電話かけてるんだ! 頭良いだろ? 今からそいつに変わるぞ!』

『なつ……ちよつと待てつ……』

最後まで言い終わらなこいつへ、
電話の相手が出た。

『もしもし』

『えつ……もしもし』

ついつい答えてしまつ。

『オッス、オラ悟空。わりいわりい、あいつ今かなり酔ってるみたいで』

クリリンとは正反対の、
低く落ち着いた声。

『問題無いが…悟空君だつたな??家の電話からかけて大丈夫な
のか???』

ベジータの問いに悟空は電話『』しで笑つて答えた。

『カカロットでいいから一番号聞いていいか?俺からかけ直すから
よ』

そして番号を交換した。これがカカロットとの出会いだ

第九話

孫悟空…

いや、力カロットと番号交換をしたあの日から毎日連絡を取り合つた。

力カロットとは会つたことがないけど話が合つ。

電話をして
わかつた事。

クラスは遠いけど同じ高校に通つていて、一度クリリンと教室まで来たことがあり、ベジータと話してみたいと思つてくれていたらしい。

二人は暇さえあれば電話やメールをしていた。

休みも終わり、
眠い目をこすりながら部隊へ向かう。

教室に着いた時机の上に置かれていたのは
一通の手紙。

【DEARベジータ FROMナッパ】

…ナッパからだ。

クリーリンと連絡をとり始めてから
ナッパに避けられている。

不安な面持ちで
手紙を開く。

【話があるから、手紙読んだら武器備蓄室まで来てねー】

手紙を握りしめたまま教室を飛び出した。

備蓄室のドアの前で
軽く深呼吸をする。

……怒ってるかな。

嫌な思いが
頭を過れる。

そつとドアを開けると
窓側の机に座っていたナッパが振り向いた。

「よひ

いつものナッパに
少し戸惑つ。

「お、おひ……

「すまんな、急な呼び出しひどー。」

「ん……」

「ベジータは、今恋してるか?」

第十話

一瞬浮かんだのは
カカロットの顔。

会ったことがない…
勝手に想像している
カカロットの顔。

「…バカが、いるわけないだろ」

ベジータの返事を聞き、
すかさず口を開くナッパ。

「俺は、今恋してるぞ…」

…相手はきっとあの人。

「まさか、クリリンか？？」

「ああ！本気なんだぞ。それで、お前はクリリンのことかい？と思つて

いるんだ?」

心配そうな顔をするナッパに対し、正直な気持ちを口にした。

「…ただの戦友だ。恋愛感情は少しもない…」

ナッパの表情が少し緩む。
ナッパは席から立ち上がり
背を向けた。

「俺、ベジータに嫉妬してたんだ。クリリンはベジータ狙っていた
ように見えたし、ベジータも好きなのか…と思つていたんだ。
疑つてすまない。トランクスに話したらどうとも怒られたぞ!」

「そうか…」

「すまんなベジータ。許してくれ?」

しんみりとした空氣の中

ナッパが振り向いて

頭を下げる。

答えは一つ。

「……もちろんだ！…」

夏休み中にカカロットという名前の男と知り合い
毎日連絡を取り合っているということをナッパに話すと

ナッパは嬉しそうにベジータの腕に自分の腕を回した。

「そうだったのか。カカロットとは、どんな人なのだろうな・・・。
ベジータ、お互い頑張るぞ」

第十一話

一時間目の戦闘は
遠方戦闘だ。

ずっと心配していたトランクスに仲直りしたことを報告し三人は戦場へ向かった。

歩いていると、
前からはヤンキーとギャル男集団が…。

その中にクリリンがいる。
確かにクリリンは
ギャル男系だ。

「クリリン」ヌンツ

クリリンのほうに
駆けて行くナッパ。

取り残された美嘉とトランクスは廊下の隅でナッパが戻つて来るの
を待つ。

その時集団のうちの一人が一人に近付いて来た。

明るい黒髪

整った細い眉毛

『亀』と書かれたオレンジ色の服

背が高い…おそらく180くらいはあるだろう。

その集団の中では、

あきらかにリーダー的存在

その男が鋭い目付きで睨みながら
こつち向かってくる。

ベジータとナッパは視線をそらし逃げる態勢をとった。

二人の前に立ちはだかったその男は口を開いた。

「おっす、オラ悟空ーお前確か、ベジータだよな?」

…悟空？カカロット？？

ギエエエー！！

夏休み中ずっと連絡とつたカカロット？

低くて落ち着いた声。

想像してたカカロットは、
爽やかで大人っぽくて…

「よろしくなー！」

カカロットは見た目から想像できないような子供みたいにあどけない笑顔で

右手を差し出した。

第十一話

引きつった作り笑顔でじんわり汗ばんだ右手を差し出し、カカロットの右手を軽く握るベジータ。

隣では彼氏いな歴16年の純情なトランクスが、薄紫の髪をフルプルと震わせながら今にも失神しそうな顔をしている。

ベジータでさえ怖いのに、トランクスには刺激が強すぎたか…。

パンッ

運よく鳴った戦闘開始を告げる空砲。

握手した手をパツと離し

放心状態のトランクスとクリリンと楽しそうに会話するナッパを強

引に引っ張り、

戦場へ向かった。

心がついて行かない。

カカロット、想像と全然違うし…。

頭をかかえていると

ナツパが教官を気にしながら耳元で呟いた。

「まさか、さつき握手してた人がカカロットなのか？！超顔良ではないか！幸運だなベジータ 僕はクリリン狙いだから安心しろ」

顔良だつたつけ。

顔見る余裕なかつた

そのまま顔を伏せているベジータにナツパは続ける。

「お互い頑張りうー サイヤ生活で顔良 gehtするぞ！」

「…まだ好きとかではない。今日会つたばかりなんだ！…」

「 いかがでいつなるかわからぬいぞ 」

この時は、
カカロットに恋するなんて全然思つてもいなかつたんだ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8582f/>

悟空 切ナイ恋物語

2010年10月10日09時20分発行